

# 日本計量生物学会ニューズレター第 100 号

2009年7月31日発行  
8月6日追記

## ～・～・～・～・～・目次～・～・～・～・～

- ① 巻頭言「インフルエンザ・タミフル・異常行動」
- ② 日本計量生物学会 2009 年度理事会議事録
- ③ 日本計量生物学会 2009 年度評議員会議事録
- ④ 日本計量生物学会 2009 年度総会議事録
- ⑤ 2009 年計量生物学講演会報告
- ⑥ 2009 年度統計関連学会連合大会のお知らせ
- ⑦ 2009 年特別セッションとチュートリアルセミナーのご案内
- ⑧ 学会誌「計量生物学」への投稿のお誘い
- ⑨ 応用統計学会チュートリアルセミナーのご案内
- ⑩ 第1回(2009 年度)計算機統計セミナーのご案内

## ～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～

5 月に予定していた年会は、統計関連学会連合大会(同志社大学)で実施することになりました。みなさま、奮ってご参加ください。詳しくは「⑥ 2009 年度統計関連学会連合大会のお知らせ」をご覧ください。

### ① 巻頭言「インフルエンザ・タミフル・異常行動」 吉村功(東京理科大学名誉教授)

2009年6月17日の朝日新聞朝刊に、“タミフルの使用—10代制限「適当」—厚労省調査会が報告”という見出しの250文字程度の小さな記事が出ていました。参考人として、この調査会会合に出ていましたので、これについての私の考えを述べます。

調査会の中心課題は、インフルエンザ罹患者がタミフルを服用することで、飛び降りや飛び出しのような、生命の危険をもたらす異常行動を起こしやすくなるかどうかです。肯定的であれば規制・制限等を強めるべきですし、否定的であれば使用の自由化を勧めることとなります。上の記事で伝えられたのは、これについて肯定・否定のどちらに対しても積極的なデータがないから従来の方針を継続する、という判断を調査会が下したということです。

調査会で検討されたデータは、大きく分けて3種類でした。薬理学的基礎実験データ、異常行動の発生頻度を調べた(通称)岡部班報告、それと全国の小児科医に依頼して得られた約1万人の患者のデータを整理した(通称)廣田班報告です。これは、統計数理研究所の藤田利治教授が参加していた(通称)横田班が2007年1～3月に集めた調査票を、廣田班がデータベース化して解析したものです。横田班が、2006年1～3月の調査票の解析に比例ハザードモデルを用いたのに対し、廣田班は、比例性が成り立たないという理由で、2群比較のオッズ比の推定と条件付きロジスティックモデルを用いた解析を行っています。

2008年12月の日本臨床薬理学会では、廣田班報告での解析方法について、厳しい批判が出ました。私も批判を述べた一人です。批判は、廣田班の解析法はデータに含まれる情報の抽出に不適切だ、というものです。前記調査会で述べたことも、この批判と一貫したもので、廣田班が扱ったデータは別の解析法で吟味した方が良く、というものです。

今までのデータによれば、タミフルがインフルエンザウイルスの体内増殖を抑制することと、タミフルを服用しなくても異常行動を起こすインフルエンザ罹患者がいることが確かです。一

方、タミフルが異常行動をもたらすことを強く主張している浜六郎氏は、服用後1日くらいが問題だとしています。

上の知見とあわせると、タミフル服用という介入の影響は、服用直後の1日～1日半とそれ以後とを区別する必要がある、ということになります。

タミフルはウイルス増殖を抑制しますが、それは服用後1日程度過ぎてから効果が出るものです。ですから服用してから2日程度たった後は、タミフルの薬効によりインフルエンザ罹患による異常行動は抑制されるのが自然ですが、服用後1日程度の間はタミフルによる異常行動の抑制は起こらないと思います。

ということは、仮にタミフルが異常行動を加速する(accelerate)としても、2日も経てば薬効が抑制に影響しますから、感染、発症、服用の時間経緯を抜きにした2群比較や比例ハザードモデルでの解析は、検討課題への適切な解答をもたらさない、ということです。服用直後は非服用群に比べて異常行動が多くなるが、しばらく後では逆に少なくなるというのが対立仮説モデルであり、直後も多くならずに一貫して少なくなるというのが帰無仮説モデルになる、というのが想定として適切だと私は思います。こういう視点がない群間比較や比例ハザードモデル下の解析は不適切だ、というのが私の主張です。

私は、この視点での解析のために、データの公開を訴えています。問題は、仮にデータが公開されるとしても、公開後に解析法を吟味するのでは、我田引水の事後解析が横行して、結局、何が何だか分からないという結論になります。だから、公開がまだ行われていない現時点で、主要解析法の検討を行っていただいた方が良く、と私は思うのですがいかがでしょうか。

同感という方がいらっしゃるなら、一緒に考えたいところです。結局はデータが公開されずに、労力が無駄になるかもしれませんが。

### ② 日本計量生物学会 2009 年度理事会議事録 大橋靖雄・浜田知久馬(庶務担当理事)

○ 2009 年第 2 回対面理事会議事録

日時: 2009 年 3 月 27 日(金)18:00～19:40

会場: 東京理科大学森戸記念館第 3 会議室

出席: 佐藤, 和泉, 上坂, 大橋, 大森, 菅波, 丹後, 服部, 松井, 三中, 森田, 山岡, 森川(監事)

欠席: 巖(委任状), 酒井(委任状), 浜田(委任状), 松山(委任状), 三輪(監事)

議事:

#### 1. 庶務担当理事からの報告

庶務担当 大橋理事から会員数の報告、名簿作成予定、パンフレット案について報告があった。名簿は、掲載を希望しない項目にチェックを入れるようにし、年内に作成すると説明があった。また、パンフレットは 5 月の年会で配布する予定であることが説明され、気がついた点は浜田理事に連絡することとされた。

#### 2. IBC2012 LOC について

国際担当 丹後理事より、3月3日に山岡理事とともに出席した日本政府観光局の説明会の報告がなされた。

### 3. 2009 年年会・企画セッション、チュートリアルについて(企画担当理事)

企画担当 上坂理事より、3月31日を締め切りとした年会一般講演の演題申し込み状況が報告された。例年と比べ申し込み数が少ないため、締め切りを1週間延ばすことに決まった。これを受けて、プログラムの発送等が延期となる。これら Web で通知すると共に、メーリングリストでアナウンスすることになった。また、演題申し込みを促すことを各理事の近くの人にも声をかけることが確認された。

企画担当 服部理事より統計関連学会連合大会での各セッションの説明がなされた。すでに統計関連学会連合大会プログラム委員である松井理事を通じて申し込みが行われ、受理されている。シンポジウムと奨励賞受賞者講演を続いた時間帯に行うことを希望している旨を伝えているが、時間に関しては現時点では未定である。

関連して、松井理事より統計関連学会連合大会でのチュートリアルに関して説明があった。チュートリアルは9月6日13:00-15:45に行われ、経済系のチュートリアルと並行して行われる。チュートリアルの会場は京都市内であるため、9月6日の夜に、京都大学で対面理事会を行う。

### 4. 編集委員会報告

編集担当 松井理事より現状の報告があった。奨励賞の選考対象は15報と多いため、候補者を3人選ぶこととなった。15報の中には会員でない著者のものがあったが、会員になってもらい、選考対象とした旨が説明された。賞の目的の1つが学会員の増員であることを考えるとその判断は妥当であるとの結論に至った。

また、電子ジャーナル化について編集委員会で検討した内容についても報告された。現在候補である J-Stage に依頼する場合、PDF を学会側で作成する必要がある。編集段階でのトンボが入ったものならば無料で入手できるので、それを公開することでよいのではないかとのことになった。また、公開する場合、著作権が問題となることが指摘され、バックナンバーに関しては、著作権の確認が必要とのことになった。作業は大変であるが、いずれにしろ明確にはしておかなくてはならない事項であるため、電子ジャーナル化が実現するかどうかとは別に、量がそれほど多くないうちに著作権の確認を行っておくことになった。

### 5. 会報について

会報担当 和泉理事より次回の会報は7月であることが伝えられた。

### 6. 学会賞について

学会賞担当 上坂理事より、学会賞、功労賞の推薦状況が説明された。次回の対面理事会は、年会開催時になるため、学会賞、功労賞、奨励賞の審議はメールで行うこととなった。

### 7. 2009 年度予算案について

会計担当 菅波理事より説明があった。一般会計の収入に関連して、学会の入会フォームでは国内学生会員は国内会員のみにはならず、必ず国際会員になるようになっているとの指摘があった。これは国内会費と国際会費を分けて計上しているため会計上は正しく、会則が誤った記述となっているためである。別途、議事とした(8. 参照)。

一般会計支出に関しては、名簿を作成するために、新たに40万円計上されたことなどが報告された。講演会等に関して計上されている予算は、チュートリアルやセミナーとは別であり、外部から講師を招聘した際の謝金や会場費などを含めたもの

であることが確認された。ホームページは広報担当 殿理事紹介の業者へ委託することを考えて50万円計上しているが、学会を対象により安く請け負う業者があることから、殿理事、丹後理事それぞれにその可能性を検討してもらうことになった。

特別会計については、項目に含めてあったチュートリアルは昨年から年会で行っているため、一般会計に移すことが決まった。また、インドで開催される EAR-BC について、国内からの学生等参加者の補助として30万円を計上し、それとは別に開催国に対する日本からの援助として30万円を計上することになった。

各学会における会計報告の公表状況について、菅波理事より説明があった。これは、ニュースレターを Web 版にしたために、現状は総会に出席しないと本学会の会計状況がわからなくなっている。このため、他学会の状況が調査された。ホームページに会計報告を載せるのも好ましくないため、本学会では、要求があれば会員に会計報告を送る旨を会報やホームページで通知することとした。

### 8. 会則の変更

組織担当 山岡理事より説明があった。事務局の移転に伴い会則変更が必要となったが、会則第3条は事務局の所在地を記載することを止め、事務局を設ける旨を記載し、具体的な所在地は細則に記すという案が示され、承認された。会則の変更は総会に諮る必要があるため、今回の総会で諮ることになる。また、(1)会費の徴収は実情に合わせ細則の第2条に記載がある1月を3月に変更する、(2)会則第3条の変更に伴う変更として細則第7条を新たに設け、事務局の所在地を明記する、(3)庶務担当理事、会計担当理事の選出は第1回評議員会で行われていないので、学会役員および評議員の選出に関する細則第4条から「庶務担当理事」「会計担当理事」という用語を削除する、という3案およびその変更履歴案が示され、承認された。入会フォームで学生会員は自動的に国際会員になるようになっている件に関しては、細則第2条3項に「ただし、学生会員は自動的に国際会員とする。」という文言を追加することにした。

また、選挙に関して、会長の信任投票が必要かどうか議論された。現状は、評議員から1名が選出され、信任投票が行われるが、投票率がいつも良いわけではない。評議員は会員の代表だと考えるならば、信任投票を廃止することで労力を省けるとの考えもある一方で、会員という意識を持つためには投票があってもいいのではないかと意見もあった。現状を考えると簡便にできることが望ましく、Web などで行うことを検討してはどうかという意見もあった。この制度ができた経緯も考慮し、なぜ信任投票を行うのかという意義をもう一度考えて、引き続き検討を続けることになった。

### 9. その他

統計関連学会連合大会での保育室の利用について報告があった。統計関連学会連合大会では、日本統計協会から毎年20万円の補助があり、保育士を2名常駐させている。利用者は例年7名程度だが、昨年はわずか1名であったことなどから、保育室を参加者に周知する必要がある、とのことであった。このため、日本計量生物学会年会での保育室の設置に関して、提案者の和泉理事を中心に検討を行うことになり、名簿を作成のときにニーズを調べることになった。

佐藤会長から IBS 本部からの会員サービスに関する評議員会での投票について説明があった。会費を維持するために、5つの項目すべてに賛成するか否かを投票する必要がある。議論の結果、本学会は、賛成票を投じるようになった。これが採用されると、会費のバリエーションが増えるので、パンフレット等を変更する必要が生じる。また、これを踏まえて今後本部が直接会費を集めるという提案が懸念されるが、現時点では日

本支部は独自に集めることが望ましいということになった。

会費の徴収について、通信欄がないため寄付ができず、改める必要があることがわかった。また、応用統計学会などでは送金手数料は学会持ちにしているため、今後、本学会もそのようなことが可能かどうか検討することになった。また、クレジットカードでの支払いが可能な学会もあるため、それを含めて検討することになった。

#### ○ 2009 年度第 1 回 e-mail 理事会議事録

標記 e-mail 理事会を 2009 年 4 月 23 日～4 月 30 日にかけて行った。議事は、(1)日本計量生物学会賞ならびに奨励賞、功労賞の選定結果について、(2)会則の変更最終確認について、(3)計量生物講演会の企画案についてである。(1)学会賞は丹後俊郎氏、奨励賞は竹内久朗氏、蔡志江氏、岡村寛氏の 3 氏、功労賞推薦は吉村功氏とすることが承認された。(2)及び(3)についても回答者全員一致で承認された。

#### ○ 日本計量生物学会 2009 年 第 3 回 対面 理事会議事録

日時：2009 年 5 月 20 日(水)17:30～19:00

会場：(財)統計情報研究開発センター(シンフォニカ)会議室

出席：佐藤、上坂、大橋、大森、菅波、丹後、浜田、松井、三中、山岡

欠席：和泉(委任状)、巖(委任状)、酒井(委任状)、服部(委任状)、松山(委任状)、森田(委任状)、森川(監事)、三輪(監事)

議事：

#### 日本計量生物学会年会の開催中止に伴う対応について

佐藤会長から、新型インフルエンザ対応による大阪大学の日本計量生物学会年会およびチュートリアル中止の経緯についての説明がなされた。会長の判断で中止を決定したが、会場の银杏会館を借りるに当たり、年会・チュートリアルは大阪大学医学系研究科との共催となっており、大阪大学は主催者の一人であったため、新型インフルエンザ対策として学内で大阪大学が主催する講演会等の開催中止・延期が決定されたことにより、実際には選択の余地はなかったと説明がなされた。

続いて、会員、参加予定者への中止の連絡方法が適切であったかについて検討した。メール、HP での中止のアナウンス、会場での中止の掲示がなされたことが報告され、大きな混乱がなかったことが確認された。

浜田理事から、今後の対応について、欠席の酒井理事、森川監事、和泉理事から預かった意見が示され、上坂理事から、中止対応後の経費計算が報告され、また延期する場合について、大阪大学、国立保健医療科学院の開場の空き状況についての報告がなされた。

以上に基づき、計量生物学会年会を中止か延期にすべきかの議論がなされた。まず年会を延期することを検討したが、かなり以前から日程を確保して会員および講演予定者に連絡しないことには講演予定者の日程調整ができないだろうということと、連合大会の後の開催とすると、多くの講演予定者が連合大会での発表を希望されることが予想され、今年度は連合大会に「年会」として参加するのがよいのではないかという結論に至り、佐藤会長から統計関連学会連合理事長に要請することになった。具体的に次のように対応の検討を進めることになった。

#### 1) 一般講演

予定していた 16 演題を、日本計量生物学会 2009 年度年会は連合大会に参加することにしたので、連合大会に一般演題

として登録してほしいと講演予定者に勧める

#### 2) 特別講演

予定していた日本計量生物学会受賞記念講演を連合大会の企画セッションとして行う。

#### 3) チュートリアル

中止し、別途、機会を設ける。可能ならば秋のセミナーのとき、難しければ来年度の年会のときにチュートリアルとして実施する。

#### 4) 特別セッション

秋の計量生物セミナー等で機会を設けることを検討する。

#### 5) 学会賞授賞式

連合大会の奨励賞受賞講演会の前に実施する。

#### 6) 評議員会

決算・予算・活動予定案等の議事を郵送で連絡し、7 月 9 日の計量生物学講演会時に、対面で行う。

#### 7) 総会

決算・予算・活動予定案等の議事を郵送で連絡し、7 月 9 日の計量生物学講演会時に、対面で行う。

#### 8) 予稿集

中止に伴い、廃棄する。発表者にも廃棄の連絡をする。

#### 9) 参加費

原則的に全額返却する。事務局から既支払者の口座番号を確認してもらい、銀行振り込みで返却。振込手数料は学会で負担する。

#### 10) 2009 年度予算

学会中止に伴う修正は行わず、決算報告で対応する。

#### 11) 対応の連絡方法

連合大会での年会開催が認められ次第、日本計量生物学会の HP に対応を掲示する。

#### ○ 2009 年度第 2 回 e-mail 理事会議事録

標記 e-mail 理事会を 2009 年 6 月 23 日～7 月 3 日にかけて行った。議事は、(1)2009 年度予算案について、(2)2010 年度からの国際会費変更に関連する調査についてであり、それぞれ回答者全員一致で承認された。

### ③ 日本計量生物学会 2009 年度評議員会議事録

大橋靖雄・浜田知久馬(庶務担当理事)

日時：2009 年 7 月 9 日(木)11:30～12:30

場所：京都大学医学部 G 棟演習室

出席：伊藤、大橋、菅波、浜田、松井、三中、和泉、上坂、大森、小川、鍵村、嘉田、後藤、佐藤、寒水、濱崎、柳川、山中

欠席：石塚、岩崎、岸野、越水、酒井、高橋、丹後、椿、西川、松山、三輪、森田、山岡、山口、大瀧、折笠、角間、小森、柴田、千葉、森川、吉村(委任状 19)

配布資料：総会報告用 PPT、2008 年度収支決算報告、2009

2009 年 7 月 9 日(木)11:30~12:30 に京都大学医学部 G 棟演習室にて 18 名の出席のもとで、会則第 33 条の 1/2 以上の出席もしくは委任状の条件が満たされたことを確認した後、評議員会が開催された。会則第 32 条に従い互選により佐藤会長が議長に推薦され、以下の議事を評議した。

議事:

### 1. 年会の中止の経緯と対応の説明

新型インフルエンザへの対応として、大阪大学にて 2009 年 5 月 20 日~22 日に予定していた 2009 年度日本計量生物学会年会・チュートリアルセミナーおよび総会を中止した経緯について、佐藤会長から説明がなされた。また以下の対応を行ったことが報告された。

#### 1) 2009 年度年次大会

2009 年 9 月 6 日~9 日に同志社大学で開催される統計関連学会連合大会で開催し、特別セッション、チュートリアルセミナーは別途開催予定(秋以降)、特別講演は連合大会企画セッションとして行う予定。また、学会賞の表彰式も連合大会で実施する。

#### 2) 予稿集

二重発表などの問題とならないよう、予稿集は廃棄処分とした。

#### 3) 大会参加費

全額返金する。原則振り込みとし振り込み手数料は学会負担とする。

参加費事前振込数が 124 人あったが、6 月 30 日時点で返金済が 97 人、返金未対応が 24 人、途上国寄付に充当を希望したのが 3 人であった。返金未対応は未だ振込先等の情報が事務局に届いていない参加申し込み者であり、身近に未連絡者がいる場合は呼びかけることが確認された。

また中止に対して、各評議員から、大きな混乱はなかったことが報告された。

### 2. 2008 年度活動報告

2008 年度活動報告では、役員構成と役割分担、各種委員会、年次大会、統計関連学会連合大会、計量生物セミナー、学会誌・会報の発行状況、メーリングリストの運営状況、理事会の開催状況、学会賞選考、等の報告があった。

年次大会は、応用統計学会との同時期開催として、筑波大学 大会会館A内ホールにて 2008 年 6 月 4 日、5 日に開催、総会およびチュートリアルセミナー(医薬品開発における統計学の活用:用量反応情報と臨床試験の計画及び解析~第 1 相から第 3 相まで)を同所にて 6 日に開催した。総会 I では日本計量生物学会賞を三輪哲久氏に、奨励賞を逸見昌之氏、二宮嘉行氏、土居主尚氏の 3 名に授与した。また功労賞を塩見正衛氏に授与し、評議員会推薦を受け同氏は名誉会員として承認された。

2008 年 9 月 7 日~10 日に慶應義塾大学で開催された統計関連学会連合大会では、企画セッションをシンポジウムとして位置づけ「医薬品の有効性・安全性評価のためのカウントデータの統計解析」を企画した。また日本計量生物学会 奨励賞受賞者講演、チュートリアルセミナー(メタアナリシス)を行った。

計量生物セミナーは 2008 年 12 月 6 日に東京大学薬学部講堂で「臨床試験におけるバイズ統計の活用」をテーマに開催した。

第 26 回国際計量生物学会議(IBC2012)の日本での開催に

ついて、2008 年 12 月 10 日に受けた IBS Executive Committee からの正式な連絡により、2012 年 8 月 26 日~31 日での神戸開催が決定したことが報告された。

また日本計量生物学会 2009-10 年度評議員選挙があり、東日本、西日本それぞれ 20 名計 40 名が当選し、2008 年 10 月 25 日(土)に東京理科大学で開催された評議員会で会長候補として、佐藤俊哉氏が推薦され、会員による信任投票で承認された経緯が報告された。

以上の 2008 年活動報告に対して、評議し、了承された。

### 3. 2008 年度決算報告

配付資料に基づき、一般会計および特別会計についての 2008 年度決算報告がなされ、特に実績と予算が大きく異なった点について説明がなされた。また監事が欠席であったため、事前に三輪・森川監事から用意された監査結果の文書を佐藤会長が読み上げ、適切に決算が行われたことが報告された。

以上の 2008 年度決算報告に対して、評議し、了承された。

### 4. 2009 年度活動予定

2009 年度活動計画では、役員構成と役割分担、年次大会、総会および計量生物学会シンポジウム、計量生物セミナー、日本計量生物学会特別講演会、学会誌・会報の発行状況、メーリングリストの運営状況、理事会の開催状況、学会賞選考、会員数、会則の変更等の報告があった。

学会賞選考に関しては、学会賞選考委員会および功労賞選考委員会、奨励賞選考委員会を任命し選考した結果が報告された。日本計量生物学会賞として丹後俊郎氏が選考され理事会で承認したこと、奨励賞として竹内久朗氏、蔡志紅氏、岡村寛氏の 3 名が選考委員会から推薦を受け理事会で承認したこと、また功労賞候補として吉村功氏を推薦することが提案され、評議員会として総会に推薦することが承認された。さらに、会則に基づき総会での承認が得られるということを前提として、功労賞候補者の名誉会員への推薦を承認した。

計量生物セミナーについては、中止になった年次大会の特別セッションおよびチュートリアルを 11 月 28 日に京都大学で行う予定であり、時期的に重なるため、2009 年度は開催されない可能性が高いことが報告された。

会則の変更については、事務局の移転に伴う対応として総則第 3 条を変更し、今後事務局が移転した場合でも対応が容易になるよう、住所は細則の第 7 条に新たに定めることとした。日本計量生物学会細則 第 2 条 日本計量生物学会役員および評議員の選出に関する細則の 4 についても、実態とは異なる面があるため、組織担当理事からの変更案が示された。

また学会ホームページについては、IBC2012 に向けての英語化を含め、予算をかけて充実させていく予定であることが報告された。

以上、2009 年度活動計画に対して、評議し、了承された。

### 5. 2009 年度予算案

配付資料に基づき、一般会計および特別会計についての 2009 年度予算案が説明された。5 月に予定されていた年次大会の中止に伴い、参加費の返還振り込み料等の新たな予算措置が必要となるが、中止に伴う必要な補正については、2009 年度決算で対応するとの報告がなされた。また前年実績をなるべく反映するように予算を組んでいると説明された。チュートリアルに関する予算は、年会との同時開催のため特別会計から一般会計に移したことが報告された。2009 年度は一般会計にホームページ作成 50 万円、特別会計にインドの EAR-BC の補助に計 60 万円の予算を計上したことが説明された。

以上、2008 年度予算案に対して、評議し、了承されたが、

特別会計は本来、途上国援助の目的が強く、EAR-BC の日本人の参加補助を計上するのは趣旨が異なるとの意見があり、この点については理事会で継続して検討を行うことになった。

## 6. その他

2010 年度からの国際会費について変更があり、正会員は学会誌とプレティンへの電子アクセスの会費として 60 ドル、冊子として学会誌を郵送で希望する場合、プラス 10 ドルが必要となる、学生会員の会費は無料となるが電子アクセスのみとなることが報告された。これに伴い、会員区分等の変更が必要となり、紙媒体の希望者の数を理事会で調査予定であることが報告された。

2010 年度の応用統計学会、日本計量生物学会の年会は、統計数理研究所(立川)において、2010 年の 5 月 20 日～22 日に開催予定であるが、会場は変更する可能性があることが報告された。

## ④ 日本計量生物学会 2009 年度総会議事録

大橋靖雄・浜田知久馬(庶務担当理事)

2009 年 7 月 9 日(木)12:35～12:55 に京都大学医学部 芝蘭会館 山内ホールにて日本計量生物学会総会が開催された。出席者数 34 名(委任状 129 通)が会則 27 条により定員数を満たしており総会が成立していることが確認され、佐藤会長を議長として以下の議事が進行した。

配布資料：2008 年度決算報告・2009 年度予算案、総会報告用 PPT

議事：

### 1. 年会の中止の対応の説明

新型インフルエンザへの対応として、大阪大学にて 2009 年 5 月 20 日～22 日に予定していた 2009 年度日本計量生物学会年会・チュートリアルセミナーおよび総会を中止したことに伴い、以下の対応を行ったことが報告された。

#### 1) 2009 年度年次大会

2009 年 9 月 6 日～9 日に同志社大学で開催される統計関連学会連合大会で開催し、特別セッション、チュートリアルセミナーは別途開催予定(秋以降)、特別講演は連合大会企画セッションとして行う予定。また、学会賞の表彰式も連合大会で実施する。

#### 2) 予稿集

二重発表などの問題とならないよう、予稿集は廃棄処分とした。

#### 3) 大会参加費

全額返金する。原則振り込みとし振り込み手数料は学会負担とする。

参加費事前振込数が 124 人あったが、6 月 30 日時点で返金済が 97 人、返金未対応が 24 人、途上国寄付に充当を希望したのが 3 人であった。返金未対応は未だ振込先等の情報が事務局に届いていない参加申込者である。

## 2. 2008 年度活動報告、決算報告

2008 年度活動報告では、役員構成と役割分担、各種委員会、年次大会、統計関連学会連合大会、計量生物セミナー(臨床試験におけるベイズ統計の活用)、学会誌・会報の発行状況、メーリングリストの運営状況、理事会の開催状況、学会

賞選考、等の報告があった。

配付資料に基づき、一般会計および特別会計についての 2008 年度決算報告がなされ、特に実績と予算が大きく異なった点について説明がなされた。また監事が欠席であったため、事前に三輪・森川監事から用意された監査結果の文書を読み上げることで監査報告に代えるとする旨の提案があり、承認された。監査結果の文書に基づき、佐藤会長から、適切に決算が行われたことが報告された。

以上の 2008 年度活動・決算報告に対して、原案の通り承認された。

## 3. 2009 年度活動計画、予算案

2009 年度活動計画では、役員構成と役割分担、年次大会、総会および計量生物学会シンポジウム、計量生物セミナー、日本計量生物学会特別講演会、学会誌・会報の発行状況、メーリングリストの運営状況、理事会の開催状況、学会賞選考、会員数、会則の変更等の報告があった。

学会賞選考に関しては、学会賞選考委員会および功労賞選考委員会、奨励賞選考委員会を任命し選考した結果が報告された。日本計量生物学会賞として丹後俊郎氏、奨励賞として竹内久朗氏、蔡志紅氏、岡村寛氏の 3 名を選考委員会から推薦を受け理事会で承認したことが報告された。また功労賞候補として理事会より推薦された吉村功氏が承認された。また評議員会から同氏が名誉会員へ推薦され、承認された。

会則の変更については、事務局の移転に伴う対応として総則第 3 条を変更し、今後事務局が移転した場合でも対応が容易になるよう、住所は細則の第 7 条に新たに定めることとし、日本計量生物学会細則 第 2 条、日本計量生物学会役員および評議員の選出に関する細則の 4 についても実態とは異なる面があるため組織担当理事からの変更案が示され、承認された。

ひきつづき、2009 年度予算案について報告があった。2009 年度活動計画・予算案に対して、原案の通り承認された。

## ⑤ 2009 年計量生物学講演会報告

上坂浩之(企画担当理事)

Scott Evans 上級研究員(Harvard University)と Geert Molenberghs 教授(Universiteit Hasselt)が大阪大学のセミナーの講師として来阪されるのを機会に、お二人に、生物・医学統計専門家を対象とした講演をお願いし、日本計量生物学会、京都大学医療統計、大阪大学臨床医工学融合研究教育センターの共催で標記講演会が、京都大学医学部芝蘭会館山内ホールで 7 月 9 日(木)に開催された。講演会は佐藤俊哉日本計量生物学会会長の挨拶で開始され、Scott Evans 博士は「Benefit:risk evaluation」、Geert Molenberghs 教授は「Longitudinal and incomplete data in clinical studies」の演題で講演された。参加者は約 50 名であった。

Scott 博士は、医薬品の安全性評価法の現状を要約された後、benefit と risk の個人内同時評価の意義と方法に関する試みを紹介された。医薬品の評価に関する統計的研究は、その多くが有効性指標に向けられている現状を指摘された。確かに安全性評価は扱う問題の広範さ、焦点の絞りにくさ、さらには、有効性と異なり重大な有害作用が発見された場合には、それ自体が開発中止につながるという点で、統計的評価になじみにくく、統計研究者の興味を惹かなかつたのかもしれない。また、benefit と risk の評価は患者や関係者の価値観にも関係しうするため、計量的研究を進めづらい点はあるであろう。日本ではかつて、有効性と安全性を統合した有用性評価が主要な評価変数とされていた。しかし、ICH の統計ガイドラインの導入

以後主観的総合評価尺度は用いられなくなり、さらに海外では有効性と安全性が独立に評価されていることもあり有用性評価は用いられなくなった。Scott 博士は、アメリカにおける個人ごとの benefit:risk の計量化の方法を、抗がん剤を例として紹介された。そのほかに日本の従来の有用性尺度に類似の、有効性と安全性の2次元空間あるいは交差分類表により benefit:risk を総合評価する試みも紹介された。Benefit:risk を個人ごとに評価することはかつての日本の薬効評価の方法に通じるものであり、今後の研究の発展が楽しみである。

Molenberghs 教授は、経時測定データの形式の解説から臨床試験における経時測定データの欠測に関するモデルと取り扱いまでを包括的に解説された。はじめに、繰り返し測定データは同一特性について同一の個人内で繰り返し測定されるデータを意味し、測定値間に相関が発生すること、そのようなデータは様々な状況で発生し、個別の問題領域においてそれぞれ異なる名称で呼ばれてきたことを、例とともに解説された。即ち、成長曲線モデル、経時データ、クラスターデータ、繰り返し測定データなどである。ついで従来行われてきた、経時データを単一の指標に要約した解析法の長所と短所を示したうえで、経時変化を切片を変量とする線形モデル及び線形混合モデルで説明する方法を例示された。最後に欠測の型として、脱落による欠測とそうでない欠測の区別、従来の LOCF や測定値が完備している被験者に限定した解析の問題及び欠測データに関するモデルについて簡潔な解説がなされた。講演は具体的な例を用いての丁寧な解説であり、この領域に馴染みのない人々には好適な解説であったと思われる。

## ⑥ 2009 年度統計関連学会連合大会のお知らせ

上坂浩之, 大森崇, 服部聡, 三中信宏, 和泉志津恵(企画担当理事)

2009 年度の統計関連学会連合大会(本学会も含め 6 学会の共催)は以下の要領で開催予定です。

日時: 2009 年 9 月 6 日(日) ~ 9 日(水)  
会場: 同志社大学 京田辺キャンパス(7 日~9 日)  
今出川キャンパス(6 日のみ)  
URL: <http://www.jfssa.jp/taikai/2009/>

5 月に予定されておりました年会が中止となり、日本計量生物学会は年会として連合大会に共催いたします。6 日のみ今出川キャンパスで開催され、チュートリアルセッションと市民講演会が開催されます。日本計量生物学会からは以下のチュートリアルが予定されています。

### ノンパラメトリック回帰入門

日時: 2009 年 9 月 6 日(日) 13:00-15:45  
講師: 竹澤邦夫(中央農業総合研究センター)

ノンパラメトリック回帰は統計学の理論としての厳格さと実用的な価値が見事に調和した分野である。今回のチュートリアルでは、多くの方々にその魅力を知っていただきたいと思う。主な内容は、線形回帰の基本概念、ノンパラメトリック回帰の意義、平滑化スプライン、局所 1 次式回帰、加法モデル、ヒストグラムの平滑化、R によるノンパラメトリック回帰である。ノンパラメトリック回帰の初歩的な技法とその背景についての解説に加えて、間違いやすい概念、既存の方法の問題点、R パッケージを使う際の注意点などにも触れる。この分野は親しみやすく感じられる反面、初歩的な間違いに陥りやすい。また、R の登場と発展によってノンパラメトリック回帰が飛躍的に手軽に利用できるようになったけれども、正しく使わなければノンパラメトリック回帰の価値を享受することはできない。そこで、今

回のチュートリアルは、数学としての明解さを維持しつつ、直感的な理解にも重点を置いて、理論と実務の両面を推進することを目指す。

7 日から 9 日は京田辺キャンパスにおいて、多くの計量生物関連のセッションを含む一般講演ならびに企画セッションが開催されます。ふるってご参加ください。計量生物学会からの企画セッションとしては以下の 3 つのセッションが企画されています。

### 1. 感染症対策における計量生物学の貢献

日時: 2009 年 9 月 7 日(月) 13:10-15:40

人類は様々な感染症と戦いその予防や治療法を発見してきた。しかし、HIV, SARS, インフルエンザなどの新興感染症や多剤耐性結核などの再興感染症など常に新たな脅威に曝され続けている。感染症の診断法を確立し、伝播経路を明らかにし患者数を推定または予測し、ワクチンの開発などにより、感染拡大の防止策を講じること、および、新たな予防法ならびに治療法の開発は極めて重要な社会的な課題である。病原体に関する研究、伝播状況の把握、感染の予防法と治療法の開発などに関して、遺伝学的な研究、疫学的方法の活用、臨床疫学研究、ワクチンや治療薬の臨床試験による有効性及び安全性の評価など、計量生物学が多大な貢献をしてきたが、新たに解決すべき課題も多い。本シンポジウムでは、感染症対策におけるいくつかの問題について、各分野の専門家にこれまでの計量生物学の貢献と課題についてご講演いただき、感染症対策に関する統計家の理解を深め、重要な社会的問題に対する計量生物学の貢献の在り方を考える契機としたい。

座長: 藤田利治(統計数理研究所)

講演者・演題:

- (1) 橋本修二(藤田保健衛生大学)  
「感染症発生動向調査に基づく流行状況の把握」
- (2) 高橋邦彦・丹後俊郎(国立保健医療科学院)  
「感染症疫学と症候サーベイランスへの疾病集積性検定の応用」
- (3) 松尾富士男(スタットコム(株))  
「ワクチンの臨床評価における計量生物学の応用」
- (4) 岸野洋久(東京大学)  
「感染症研究における統計遺伝学的アプローチの可能性」

### 2. 日本計量生物学会賞受賞者講演および 2009 年度学会賞授与式

日時: 2009 年 9 月 7 日(月) 16:00-17:30

日本計量生物学会は、研究者へ刺激を与え、若い研究者の成長を促進し、また研究環境の開拓と研究の発展・拡大を期待して学会賞、功労賞、奨励賞の 3 賞を 2003 年に創設した。日本計量生物学会賞は、顕著な研究成果を発表した学会員に授与される賞である。更なる計量生物学の発展、ならびに広く統計学の研究者あるいは利用者の方々に計量生物学への関心を高めていただくことを目的として、本セッションでは、2008 年の学会賞受賞者に受賞対象となった研究の紹介や今後の展望をお話していただく。併せて、2009 年度学会賞各賞の授与式を行う。

講演座長: 丹後俊郎(保健医療科学院)

講演者・演題:

三輪哲久 (農業環境技術研究所)

「農業研究と多重比較手法」

授与式司会: 大橋靖雄 (東京大学), 浜田知久馬 (東京理科大学)

### 3. 日本計量生物学会奨励賞受賞者講演

日時: 2009年9月8日(火) 10:00-12:00

計量生物学の若手研究者の優れた研究成果に対して、その成果についての講演の機会を提供することにより更なる研究の発展を奨励するとともに、計量生物学会会員、及び計量生物学に関心を抱く方々の研究を刺激し、また、広く統計学の研究者あるいは利用者の方々に計量生物学への関心を高めていただくことを目的として、2009年の奨励賞受賞者に、受賞対象となった論文を中心に研究の紹介をしていただく。日本計量生物学会は、研究者へ刺激を与え、若い研究者の成長を促進し、また研究環境の開拓と研究の発展・拡大を期待して学会賞、功労賞、奨励賞の3賞を2003年に創設した。奨励賞は日本計量生物学会誌または *Biometrics* 誌、または *Journal of Agricultural, Biological, and Environmental Statistics* 誌に掲載された論文の著者で40歳未満の本学会員または学生会員から選出される。

座長: 松井茂之 (統計数理研究所)

講演者・演題:

- (1) 岡村 寛 (遠洋水産研究所)  
「野生生物の擬似反復データに対する資源選択性分析」
- (2) 竹内久朗 (田辺三菱製薬(株))  
「Utility of Generalized Hazards Model incorporating Cubic B-spline Function into the Baseline Hazard Function」
- (3) 蔡 志紅 (日本イーライリリー(株))  
「Bounds on Direct Effects in the Presence of Confounded Intermediate Variables」

## ⑦ 2009年特別セッションとチュートリアルセミナーのご案内

上坂浩之, 大森崇, 服部聡, 三中信宏, 和泉志津恵 (企画担当理事)

5月の年会で予定されていた特別セッションと同時に開催予定であったチュートリアルセミナーを楽しみにされていた方は多かったのではないかと思います。残念ながら5月には行えなかったのですが、演者、講師の先生のご都合を確認しながら企画担当理事の間で検討をしてきましたところ、下記の日程で開催できることになりました。事前登録による申し込みなどのお知らせは今後メールニュース、ホームページを通じて行うようにいたします。秋の京都に是非お越しください。

日時: 2009年11月28日(土)

13:00-15:30 特別セッション

16:00-18:30 チュートリアルセミナー

会場: 京都大学医学部 G棟(総合研究棟)2F セミナー室 A

参加費: 正会員, 後援学会員 3,000円(事前登録 2,500円), 非会員 6,000円(事前登録 5,500円), 学生(会員, 非会員とも) 1,000円

### 1. 特別セッション

『臨床試験におけるサロゲートエンドポイントの評価: 臨床的

視点と統計的視点』

オーガナイザー: 手良向聡(京都大学), 松井茂之(統計数理研究所)

座長: 手良向聡(京都大学)

講演者・演題:

- (1) 本セッションの趣旨  
手良向聡(京都大), 松井茂之(統計数理研究所)
- (2) イントロダクション・背景  
「Using and Validating Surrogate Endpoints Towards Accelerated Approvals」折笠秀樹(富山大)  
「統計的方法のオーバービュー」竹村徹(帝人ファーマ株式会社), 小川幸男(日本イーライリリー株式会社), 上原秀昭(株式会社ツムラ), 西田朋由(ノボルディスクファーマ株式会社)
- (3) 前立腺がん試験におけるPSAの役割  
「臨床の立場から」樋之津史郎(京都大)  
「統計の立場から」田中司朗(京都大), 松山裕(東京大), 大橋靖雄(東京大)
- (4) 胃がん術後化学療法の評価における全生存期間に対する無病生存期間の代替性  
「臨床の立場から」坂本純一(名古屋大)  
「統計の立場から」大庭幸治(京都大)
- (5) 討論

内容・趣旨: 近年、臨床試験におけるサロゲートエンドポイントの統計的評価に関する多くの研究が行われ、様々な統計的規準が提案されている。しかし、実際の臨床試験では、事例ごとに慎重な検討が必要である。そこで欠かせないのは、いうまでもなく、臨床的な視点である。本セッションでは、サロゲートエンドポイント評価の現状のレビューに続いて、二つの臨床試験の事例を紹介する。それぞれの事例で、臨床家からの臨床的視点の提示に対し、それに応える形で統計家から統計的視点を提示し、サロゲートエンドポイントの評価の仕方について議論する。一般論だけでなく、個々の臨床試験での議論を知り、それに参加する機会は貴重である。本セッションが臨床家と統計家の更なる共同研究に資することが出来れば幸いである。

### 2. チュートリアルセミナー

『ゲノムデータ・オミックスデータを解析するための新しい統計方法と機械学習の方法』

オーガナイザー, 座長: 和泉志津恵(大分大学)

講師: 江口真透(統計数理研究所)

内容・趣旨: 現在、生物・医学分野においてデータの形式が大きく変容して高次元・小標本データの適切な統計解析法の開発が急務となっている。特に医学データは近い将来、従来の臨床データに加えてゲノム関連データが付随されることが一般的になると考えられる。しかし、このようなデータの解析のための標準的な統計手法がまだ適切に開発されていないのが現状である。このチュートリアルでは特にゲノム関連データの解析について現況の幾つかのアプローチを紹介し、それらの統計的性能の限界や問題点を指摘すると共に今後の方向について紹介する。

話題の構成は、I部ではバイオインフォマテクスにおけるデータ解析の基本的課題である「 $p \gg n$  問題」を説明する。特にマイクロアレイを特徴ベクトルとする治療効果予測について

の事例研究から典型的な  $p \gg n$  の困難な問題を考える。II 部ではスパース学習としてパラメータの L1 ノルムの正則化の方法が過大な次元数  $p$  を有効に削減する方法として注目されている, 特に Lasso について概説する。次に機械学習で注目されているパターン認識のためのブースティングやカーネル法について紹介する。

なお, 同日午前中に, 応用統計学会主催のチュートリアルセミナーが開催されます。併せてご参加ください。

## ⑧ 学会誌「計量生物学」への投稿のお誘い

松井 茂之 (編集担当理事)

本学会雑誌である「計量生物学」に会員からの積極的な投稿を期待しています。会員のためになる, 会員相互間の研究交流をより一層促進するための雑誌をめざすため, 以下の 5 種類の投稿原稿が設けてあります。

### 1. 原著 (Original Article)

計量生物学分野における諸問題を扱う上で創意工夫をこらし, 理論上もしくは応用上価値ある内容を含むもの。

### 2. 総説 (Review)

あるテーマについて過去から最近までの研究状況を解説し, その現状, 将来への課題, 展望についてまとめたもの。

### 3. 研究速報 (Preliminary Report)

原著ほどまとまっていなくてもノートとして書き留め, 新機軸の潜在的な可能性を宣言するもの。

### 4. コンサルタント・フォーラム (Consultant's Forum)

会員が現実に直面している具体的な問題の解決法などに関する質問。編集委員会はこれを受けて, 適切な回答例を提示, または討論を行う。なお, 質問者(著者)名は掲載時には匿名も可とする。

### 5. 読者の声 (Letter to the Editor)

雑誌に掲載された記事などに関する質問, 反論, 意見。

論文投稿となると, 「オリジナリティーが要求される」, 「日常業務での統計ユーザーにとっては敷居が高い」などを理由に二の足を踏む会員が多いかもしれませんが, 上記の「研究速報」, 「コンサルタント・フォーラム」は, そのような会員のために設けられた場であり, 活発に利用されることを特に期待しています。いずれの投稿論文も和文・英文のどちらでも構いません。投稿に際しては, 雑誌「計量生物学」に記載されている投稿規程を参照ください。

また, 2004 年度から学会に 3 つの賞が設けられ, その一つである奨励賞は, 「日本計量生物学会誌, Biometrics, JABES に掲載された論文の著者(単著でなくても第 1 著者かそれに準ずる者)で原則として 40 歳未満の本学会の正会員または学生会員を対象に, 毎年 1 名以上に与えられる賞」です。最近では, 履歴書の賞罰欄に「なし」と書くこと公募の際に引け目を感じるくらいです。会員諸氏の意欲的な論文投稿をお待ちしております。

## ⑨ 応用統計学会チュートリアルセミナーのご案内

主催: 応用統計学会, 後援: 日本計量生物学会

日時: 2009 年 11 月 28 日(土) 10:00-12:00

会場: 京都大学医学部 G 棟(総合研究棟)2F セミナー室 A

テーマ: テキストマイニングの基本的な考え方と諸種の実践

## 事例

オーガナイザー: 渡辺美智子(東洋大学), 瀬尾隆(東京理科大学)

講師と演題:

金明哲(同志社大学)「テキストマイニングの基本的な考え方と諸種の実践事例」

参加費: 正会員, 後援学会員 2,000 円, 非会員 5,000 円, 学生(会員, 非会員とも) 1,000 円

申し込み方法: 特に事前に参加希望の申し込みは必要ありません。当日会場にお越しください。

照会先: 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 3-6 能楽書林ビル 5F (財)統計情報研究開発センター内 応用統計学会事務局

e-mail: applstat@sinfonica.or.jp, FAX: 03-3234-7868

## ⑩ 第1回(2009 年度)計算機統計セミナーのご案内

主催: 日本計算機統計学会, 後援: 日本計量生物学会

日時: 2009 年 9 月 5 日(土) 13:15-16:45

会場: 京都府立総合社会福祉会館(ハートピア京都)

視聴覚室(3階)

テーマ: Adaptive デザイン~臨床試験への応用

オーガナイザー: 坂本亘(大阪大学)

講師: 小山暢之(第一三共株)ほか

参加費(テキスト代を含む):

正会員, 後援学会員: 一般 7,000 円, 学生 4,000 円

非会員: 一般 15,000 円, 学生 8,000 円

参加登録:

学会ウェブページにある申込フォームからオンラインでお申し込みいただけます。8 月 21 日(金)までに事前の参加登録をし, 8 月 28 日(金)までに参加費のお支払いが必要です。ただし, 定員に達し次第締め切りとさせていただきますので, お早めにお申し込みください。

計算機統計セミナー申込フォーム:

URL: [http://www.jscs.or.jp/seminar/seminar01\\_form.html](http://www.jscs.or.jp/seminar/seminar01_form.html)

照会先: 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 3-6 能楽書林ビル 5F (財)統計情報研究開発センター内 日本計算機統計学会事務局

TEL:03-3234-7580 (平日 9:30~17:00), FAX:03-3234-7580

セミナー専用 e-mail: seminar@jscs.or.jp

## 訃報のお知らせ

統計数理研究所名誉教授・元所長赤池弘次先生(享年 81 歳)が 8 月 4 日(火)午前 6 時頃にご逝去されましたのでお知らせいたします。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

計量生物学会ニューズレター100号  
2009年7月31日発行, 8月6日追記  
発行者 日本計量生物学会  
発行責任者 佐藤俊哉  
編集者 酒井弘憲, 和泉志津恵